

江吏部集試注（十五）

木戸，裕子
鹿児島県立短期大学教授

<https://doi.org/10.15017/10331>

出版情報：文献探究. 45, pp.60-74, 2007-03-30. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：



江吏部集試注 (十五)

木戸 裕子

(承前)、(十四)は『人文』第二十九号に掲載している。

凡例

一、底本は板本群書類従を用い、後述の諸本により適宜異同を挙げた。
一、校異では、逐一の異同を挙げるのではなく、本文解釈に関わるものだけを記した。したがって、異体字については挙げていない。

一、校異に用いた諸本と略号は次の通りである。

内閣文庫(旧浅草文庫) 本一(内) 山口県立図書館本一(山)

陽明文庫本一(陽) 祐徳稲荷本一(祐)

静嘉堂文庫本一(静) 神宮文庫本一(神)

国会図書館本一(国) 無窮会図書館本一(無)

東大図書館(E45 656) 本一(東A)

東大図書館(旧南葵文庫) 本一(東B) 岡山大図書館本一(岡)

島原松平文庫本一(島) 東北大図書館本一(東北)

京大図書館本一(京) 多和文庫本一(多)

賀茂別雷文庫本一(賀)

名古屋市立鶴舞中央図書館本一(鶴)

本朝文粹(新日本古典文学大系) 一(粹)

本朝麗藻(校本本朝麗藻) 一(麗)

一、本文の漢字はできるだけ現行の字体に統一した。ただし、次の漢字は底本の字体を尊重した。

煙・烟 花・華 叢・藜 窓・牕 藝・芸など

一、割注など小書の部分は「」に入れて示した。

一、訓読文は必ずしも平安時代の訓みによるものではないが、古辞書類を参考にした。

付記 本稿を作成するにあたっては、東京大学史料編纂所データベース、

ス、台湾中央研究院漢籍電子文獻資料庫を利用させていただいた。

学恩に感謝いたします。

※本試注はこれまでではじめから順に注釈をつけてきて、(十四)では巻上四十三番まで進んだが、本稿(十五)では、巻中の七十七「述懐古調詩 一百韻」の前半部分一句目から百二句までを取り扱う。

後半は『人文』三十一号に掲載予定である。本詩は百韻と長いため、十句目ごとに上に番号を付した。なお、本詩には今浜通隆氏による詳細な注がある。〔述懐。古調詩。一百韻〕訳注『本朝麗藻全注釈二』新典社 平成十年〕また、後藤昭雄氏による匡衡の伝記『人物叢書 大江匡衡』も本詩を第一次資料とし、一部解釈を載せる。

七十七 述懐古調詩一百韻

1 優遊何所詠

身上旧由縁

七歳初読書

騎竹擊蒙泉

九歳始言詩

挙花戲霞阡

十三加元服

祖父在其筵

提耳殷勤誠

努力可攻堅

我以稽古力

早備公卿員

汝有帝師体

必遇文王田

少年信此語

意氣独超然

優遊 何の詠ずる所ぞ

身上と旧き由縁となり

七歳にして初めて書を読み

竹に騎りて蒙泉を撃つ

九歳にして始めて詩を言ひ

花を挙げて霞阡かせんに戯る

十三にして元服を加ふるに

祖父 其の筵に在り

耳を提して慇勤に誠む

努力して堅きを攻むべし

我 稽古の力を以て

早く公卿の員に備はれり

汝 帝師の体有り

必ず文王かりの田に遇はん

少年 此の語を信じ

意氣 独り超然たり

20

下帷不窺園

閉戸不趨權

困基厭坐隱

投壺罷般還

浮沈泗水底

昇降尼山巔

夜宴文峯壘

朝宗学海吞

嶮難無不嘗

寂寞於是饑

運心西方月

六齋学坐禪

提步南山雲

五度断腥羶

口海浮般若

敬礼金剛拳

心台持妙法

帰依大宝蓮

遂使江二号

与菅三比肩

〔当初学中呼菅三江二為一双〕

帷を下ろして園を窺はず

戸を閉じて權に趨たらず

困基は坐隱を厭ひ

投壺は般はん還を罷む

泗水の底に浮沈し

尼山の巔に昇降す

夜には文峯を壘たのむことを宴し

朝には学海を吞むことを宗とす

嶮難 嘗めざる無く

寂寞 是に於いて饑せんたり

心を西方の月に運び

六齋 坐禪を学ぶ

歩を南山の雲に提たげ

五度 腥羶を断つ

口海に般若を浮かべ

金剛拳を敬礼す

心台に妙法を持し

大宝蓮に帰依す

遂に江二の号をして

菅三と肩を比べしむ

〔当初 学中 菅三と江二を呼びて一双

と為す〕

十有五にして学に入り

久しく豆とうと籩へんとを執る

十六奉寮試
音訓無所愆
栖遲身未達
亡考早為煙

曾無提獎人

心灰独自然

請賜學問料

三代久窳遭

請補文人職

兩儒多頗偏

比及二十四

纒蒙奉勅宣

馮學登龍門

泝流出重淵

竊見題目下

題教學為先

仲尼弟子名

每句各用旃

五言八十字

瀝思寫華牋

及第十六人

曳裾共周旋

明年挙秀才

豫樟期七年

二十八獻策

十六にして寮試を奉じ
音訓 愆まつ所無し

栖遲して身未だ達せざるに

亡考 早くも煙と為る

曾て提獎する人無く

心は灰のごとく 独り自づから然り

學問料を賜はることを請ふも

三代久しく窳遭す

文人職に補せらるることを請ふも

兩儒頗偏多し

比ほひ二十四に及ぶに

纒かに勅宣を奉ずることを蒙る

學に馮りて龍門を登り

流れを 泝りて重淵を出づ

竊かに題目の下を見るに

教學を先と為すに題す

仲尼の弟子の名

句毎に各おの旃を用ふ

五言八十字

思ひを瀝ぎて華牋に写す

及第するもの十六人

裾を曳きて共に周旋す

明年 秀才に挙げられ

豫樟 七年を期す

二十八にして策を献ずるに

徵事玄又玄
所対過半分

射鵠纒貫穿

三十一給官

廷尉列鷹鷲

三十三采爵

憲台緩刑鞭

三十八翰林

蝸舍引群賢

四十六学士

龍樓景氣妍

四十七四品

職主衡与銓

其年秋九月

尽日枕帙眠

疎帷風颯颯

閑庭草芊芊

遙聽雁櫓過

空任蛛網懸

忽有叩門者

青鳥翅聯翩

云是有勅喚

驚遽衣裳顛

促車向西行

緼袍殆不全

徵事玄又玄
対ふる所 半分を過ぎ

鵠を射て纒かに貫穿す

三十一にして官を給ひ

廷尉 鷹鷲に列す

三十三にして采爵し

憲台 刑鞭を緩くす

三十八にして翰林たり

蝸舍 群賢を引く

四十六にして学士たり

龍樓 景氣妍し

四十七にして四品たり

職は衡と銓とを主とす

其の年 秋九月

尽日 帙を枕に眠れり

疎帷に風颯颯たり

閑庭に草芊芊たり

遙かに雁櫓の過ぎるを聴き

空しく蛛網の懸くるに任す

忽ちに門を叩く者有り

青鳥 翅 聯翩として

云に是れ勅喚有り と

驚き遽て 衣裳顛す

車を促して西に向かひて行けば

緼袍 殆ど全からず

入自待賢門

待賢門たいけんもん自り入り

禁掖尋中涓

禁掖きんえきに中涓ちゆうけんを尋ぬ

夕郎手持書

夕郎せきろう手に書を持ち

口以勅語伝

口に勅語を以て伝ふ

此孔子世家

此の孔子家語

家家説不詮

家家の説そなは詮はらず

宜以江家説

宜しく江家の説を以て

備之叡覽焉

之を叡覽に備ふべしと

奉詔汗浹背

詔を奉じて汗背うろほに浹はひ

浅学恐自專

浅学自ら專にするを恐る

抽毫立加點

毫ふでを抽ぬきて立ちどころに點こたを加ふれば

指掌心于乾

指掌を指すがごとく乾きみにこた応こたふ

追憶祖父言

祖父の言を追憶すれば

湿巾涙潺湲

巾きんを湿ぬして涙なみだ潺湲せんげんたり

【校異】

擊蒙泉―繫蒙泉（底本（群書類従本）、他本ニヨリ改ム）

蓮心―蓮心（底本、他本ニヨリ改ム）

【押韻】

一韻通底で偶数句に押韻。下平声仙韻。本詩は古詩であるため、韻字のみを挙げる。

縁 泉 阡（先韻 仙韻同用） 筵 堅（先韻 仙韻同用） 員 田（先韻 仙韻同用） 然 權 還（先韻 仙韻同用） 巔（先韻 仙韻同用） 呑（先韻 仙韻同用） 鱣 禪 羶 拳 蓮（先韻 仙韻同用） 肩（先

韻 仙韻同用） 籩（先韻 仙韻同用） 愆 煙（先韻 仙韻同用） 然

遭 偏 宣 淵（先韻 仙韻同用） 先（先韻 仙韻同用） 旃 旋

年（先韻 仙韻同用） 玄（先韻 仙韻同用） 穿 鷓 鞭 賢（先韻

仙韻同用） 妍（先韻 仙韻同用） 銓 眠（先韻 仙韻同用） 芊（先

韻 仙韻同用） 懸（先韻 仙韻同用） 翮 顛（先韻 仙韻同用）

全 涓（先韻 仙韻同用） 伝 詮 焉 專 乾 湲

【制作年代】

詩後半の「再為合浦守」「更作武城宰」から匡衡が三度目の尾張守となつた（實際の赴任は二度目）寛弘六年から丹後守に遷任された寛弘七年三月の間と考えられる。（今浜通隆「述懐。古調詩。一百韻」訳注『本朝麗藻全注釈二』）

【語釈】

◎優遊〓ゆつたりとしてこせつかないさま。「伴奂爾游矣 優遊爾休矣」

◎詩経 大雅 「卷阿」

◎身上〓自分自身のこと。「千万思量身上事 窓間報得欲明天」〔菅家

文章〕卷四「冬夜閑思」

◎由縁〓事の由来。「仍叙由縁、景儁便記」〔魏書〕「鹿念列伝」

◎七歳初読書〓読書初め。たとえば、一条天皇は九歳、匡衡の曾孫匡

房は四歳が読書初めであつた。また、白居易は十歳で読書を始めた

らしい。「十歳解読書 十五歳能属文」〔白氏文集〕四四七「朱陳村」

「我聖靈陛下、七歳即帝位、九歳携詩書」〔本朝文粹〕卷十四「一

条院四十九日御願文」大江匡衡「予四歳始読書。八歳通史漢」〔暮

年記〕大江匡房

◎騎竹Ⅱ竹馬に乗る。子どもの遊び。「小兒五歳曰鳩車之戲 七歳曰竹馬之戲」《博物誌》

◎擊蒙泉Ⅱ蒙泉は泉の名。また、蒙は童蒙。また学問を始めていないこども。擊蒙は無知な子どもに学問をさせること。「上九、擊蒙、不利為寇、利禦寇。」〔注〕擊去童蒙、以發其昧者也」《周易》「蒙」

「皇子月中謝智 山下擊蒙」《本朝文粹》卷九「七言 冬日於飛香舍聽第一皇子初読御注孝経」大江以言「竹馬遊びをするような幼児が学問を始めることをいう。

◎拳花戲霞阡Ⅱ阡はあぜ道。霞阡は霞にけぶる春の道。「飛甕月徑列 塵霞阡 乾谿敗楚碣石亾燕」《全唐文》卷一七八「九成宮頌」王勃一句は始めて詠んだ詩の内容をいう。あるいは詩題かとも思われるが、九歳の子どもが始めて詠む詩の題としては難しすぎるか。

◎十三元服Ⅱ匡衡の元服が十三歳の時という史料は本詩のみ。康保元年（九六四）。

◎祖父Ⅱ大江維時。ただし、維時は匡衡元服の前年、応和三年（九六三）に薨じている。祖父の言葉は、匡衡の一生を方向付けた。その重要性を強調するために、あえて事実を曲げてまで元服時の言葉としたか。

◎提耳Ⅱ耳に口を近づけ丁寧教える。「故染提耳之教者 擊其蒙」《本朝文粹》卷九「北堂漢書竟宴詠史得蘇武」紀在昌「抑近代成業之輩 悉是儒門之胤也。文籍隨身 提撕在耳」《本朝文粹》卷六「請被特蒙天恩兼任民部大輔闕狀」橘直幹

◎殷勤Ⅱ懇ろ、丁寧。懇懇に同じ。「静接殷勤語 狂随爛漫遊」《白氏文集》一二七一「代人贈王員外」「公子王孫競相挑 月前花下通殷懇」《本朝文粹》卷一「貧女吟」紀長谷雄

◎攻堅Ⅱ強固なもの、困難に立ち向かう。「天下莫柔弱於水、而攻堅強者莫之能勝、以其無以易之」《老子》第七八章

◎稽古力Ⅱ学問の力。十七「暮春応製」の「稽古力」の語釈参照。

◎公卿員Ⅱ大江維時は天曆四年に参議正四位下、天徳四年に中納言従三位。

◎文王田Ⅱ田は狩り。周文王が狩に行き太公望呂尚を見いだした『蒙求』四「呂望非熊」でしられる故事。

◎超然Ⅱ世俗にとらわれず、孤高をたもつさま。「浩蕩八溟闊 志泰心超然」《白氏文集》三五四六「送毛仙扇」

◎下帷Ⅱとばりを下ろす。人前に出ず学問に専心すること。前漢の董仲舒が帷を下ろして読書をした「董生下帷」の故事は有名。「漢書、董仲舒、少耽学。俗謂、董生常下帷読書、弟子不見其面。在家七年、不窺後園、乘馬三年、不知牝牡。後仕至江都王相」〈宮内庁書陵部蔵影鈔本『蒙求』二五八「董生下帷」〉「下帷之士 不窺其園」《本朝文粹》卷十三「勸学院仏名廻文」慶滋保胤

◎窺園Ⅱ庭を見る。前述の『蒙求』「董生下帷」の故事による。前漢の董仲舒は学問に励み、七年間家においても庭や畑を見ることをしなかった。「既忘窺園 無見流麦」《本朝文粹》卷十二「詰眼文」三善清行

◎閉戸Ⅱ家に閉じこもる。人に会わないさま。「帰來嵩洛下 閉戸何倚然」《白氏文集》一二七九「引泉」縦無閉戸垂帷意 当会文宣享苾芬」《菅家文章》卷二「勸野宮住学曹」閉戸之生 不出其園」《本朝文粹》卷十三「勸学院仏名廻文」慶滋保胤

◎趨権Ⅱ趨ははしる、おもむく。権勢のある者のもとに赴く。貴人の詩会などに呼ばれることをいうか。

◎趨権Ⅱ趨ははしる、おもむく。権勢のある者のもとに赴く。貴人の詩会などに呼ばれることをいうか。

◎ 困碁 || 平安時代、困碁は宮中や貴族の邸宅で男女問わず行われた。学者が困碁をする例としては、平安時代末の説話ではあるが、匡衡の曾孫である大江匡房の『江談抄』に吉備真備が入唐して唐人と困碁を打つ話を載せる。↓大曾根章介「平安朝文学に見える困碁」『大曾根章介 日本漢文学論集』第三卷（初出は『和漢比較文学』第十号）

◎ 坐隠 || 困碁の別名。居ながらにして隠遁する意。「王中郎、以困碁為坐隠」『世説』巧藝

◎ 投壺 || 宴席の座興。一つの壺に賓主が矢を投げ入れて勝負する。負けた者は罰杯を飲む。「投壺之礼、主人奉矢、司射奉中、使人執壺。主人請曰、某有枉矢哨壺、請以樂賓。賓曰、子有旨酒嘉肴、某既賜矣、又重以樂、敢辭。…」『礼記』「投壺」 「鼓応投壺馬 兵衝象戲車」『白氏文集』二六六九「和春深 一七二」

◎ 般還 || 投壺の用語。主人と賓客とが矢を受け渡す時にためらって進まないこと。「賓再拜受、主人般還曰、辟。主人阼階上拜送。賓般還曰、辟。…」『礼記』「投壺」

◎ 泗水 || 川の名。孔子がこの川のほとりで道を説いた。転じて儒学をいう。「孔子葬魯城北泗上。弟子皆服三年」『史記』「孔子世家」 「三教泗水忘恩沢 橘使槐林損旧風」『本朝文粹』卷十二「秋夜書懷呈諸文友兼南隣源処士」藤原衆海（在列）

◎ 尼山 || 尼丘。孔子の生まれた山。また、孔子の異称。「紇与顔氏女野合、而生孔子。禱於尼丘、得孔子。故名丘、字仲尼」『史記』「孔子世家」

◎ 文峯 || 詩文の峯。試作の場を険しい山にたとえる。二十三「九月尽日於秘芸閣同賦秋唯残一日詩一首」の「文峯」の語釈参照。

◎ 宴 || たのしむ。「宴シツカニヤスシタノシ」『観智院本類聚名義抄』

◎ 呑学海 || 呑海は大海を呑む。志の大きいたとえ。「学海」は学問の広大で果てしないことを海にたとえる。文峯との対でいう。前聯の「泗水・尼山」との関連で「文峯・学海」といった。

◎ 嶮難 || 「険阻艱難 備嘗之矣」『春秋左氏伝』「僖公二十八年 伝」
◎ 寂寞 || ひっそりとして寂しいさま。疊韻語「病添心寂寞 愁入鬢蹉跎」『白氏文集』七一三「晚秋有懷鄭中旧隠」

◎ 饘 || かゆ。かたがゆ。かゆをすすするような質素で厳しく己を律した生活をいうか。

※以下、二十七句から三十四句までは十代前半での匡衡の仏教への傾倒を述べる。ただし、ここに描かれる熱心な信仰は、十五歳での大学寮以降全く述べられることがない。これはいかにも不審である。ここに描かれる仏道信仰は、実際には大学寮入学後の勸学会での活動のことではないかと考えられる。勸学会は比叡山の僧侶と大学寮の学生によって始められた法華経の講義と念仏、仏法を称える詩の制作を行う会である。勸学会が始めて行われた康保元年は匡衡が十三歳で元服した年であり、匡衡は草創時の結衆（けっしゅう）ではなかったが、第一次の結衆ではあったことが知られている。（小原仁『文人貴族の系譜』、後藤昭雄『勸学会記』について）『平安漢文文献の研究』所収）、同『天台仏教と平安朝文人』「同学の学生たちだけではなく、僧侶たちも交えた交流は若い匡衡にとつては得難い体験だったに違いないが、それを大学寮入学のあとに加えなかったのは本詩の構成上の問題であろう。本詩では大学寮入学後は大江家の学問を継承すべく、寮試、省試、対策の受験と合格に焦点を絞って述べられてい

る。そこに仏事の比重の大きい勸学会を入れると全体のバランスが崩れる。しかし、匡衡自身に与えた影響を考える時全くふれないわけにはいかない。そこで、勸学会での活動というのを曖昧にしたまま、入学前の厳しく自己を抑制した生活に関する記述について記したと考え、本試注ではそのように解釈した。

◎運心ニ心をはこぶ。「秋山運心」所設者百羅漢之綺饌「『本朝文粹』卷十四「同院（朱雀院）周忌御願文」大江朝綱」

◎西方ニ西方の極楽浄土。阿弥陀の浄土。「曾向衆中先礼拜 西方去日莫相遺」『白氏文集』二八〇五「神照上人」

◎六齋ニ六齋日の略。一ヶ月中で、八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、三十日の六日は梵天、帝釈天が国政を見、また悪鬼が人を伺う日なので精進日として忌み慎む。とくに正午過ぎの食事を一切絶つ。

◎坐禅ニ正しく結跏趺坐して沈思黙念する仏道の修行法の一つ。白居易も生涯を通じて好んで坐禅を行った。「自学坐禅休服薬 従他時復病沈沈」『白氏文集』八七〇「罷薬」。「寂寥山中坐禅師 一乘蓮華能憶持」『本朝麗藻』卷下「近来播州書写山中、有性空上人者。誦法華経為事、寤寐不休。…令綴拙什、聊結後縁」具平親王「休世夢断塵縁 苒苒唯展坐禅筵」『本朝文粹』卷一「山家秋歌 その三」紀長谷雄

◎提歩ニあゆみを進める。「提ヒサクヒサケトルトフヤスシツムス、ムウツ」『観智院本類聚名義抄』ここでは勸学会に参加し、天台の教えの道に進むことをいう。

◎南山ニ中国五嶽の一、衡山のこと。平安朝においては南山は一般的に高野山を指す。が、ここでは、衡山すなわち南山に住みそこで入

滅した、中国天台宗第二祖である南岳大師慧思を指し、南岳大師の教え、すなわち天台宗の教えをいう。平安朝以来、南岳大師慧思は我が国の聖徳太子に生まれ変わったという伝承があり、慧思の存在はよく知られていた。「太子奏曰、…児昔在漢住南岳、歴数千年、修行仏道」『日本往生極楽記』「聖徳太子」。「思其昇霞、亦同南岳大師臨終之日」『本朝文粹』卷十四「一条院四十九日御願文」大江匡衡

◎腥羶ニなまぐさのもの。肉や魚。なまぐさものを断つのは精進潔斎のため。「仲夏斎戒月三旬断腥羶」『白氏文集』三七「仲夏斎戒月」

◎口海ニ口を海にたとえる。

◎般若ニ大般若経。匡衡は尾張守の任の満ちる寛弘元年十月に尾張熱田宮で大般若経を供養している。『本朝文粹』卷十三「於尾張國熱田神社供養大般若経願文」大江匡衡「あるいは次句の「金剛拳」との関係から金剛般若経を指すか。「抑大般若経一部六百卷、金剛般若経三百卷、未揚題名、忽作煨燼」『本朝文粹』卷十四「陽成院四十九日御願文」大江朝綱」また、大江氏は玉淵が洛西、仁和寺の側に般若寺を創建し、維時、匡房と相続されていた。『江吏部集』にも上巻に「秋日遊般若寺同賦秋山似画図」の詩があり「先祖相伝之善地」と詠んでいる。

◎金剛拳ニ四種拳の一。金剛は如来の秘密の智慧の喩え。一切の煩惱を破壊する堅固な知徳。「金剛喩如来秘密慧也、金剛無有法能破壊之者、而破壊万物、此智慧亦爾」『大日経疏』十二「作拳法有其四種、第一如常作拳法、大指堅之、次以空指在於掌中而拳之、名金剛拳」『大日経疏』十三

◎心台ニ台は蓮台。心中に仏のいます蓮の台がある、すなわち信仰を

抱いていることをいう。「口蔵宣伝十二部心台照耀百千燈」(『白氏文集』三〇七五「贈草堂宗密上人」)

◎妙法二すぐれた仏の教え。妙法蓮華經、法華經のこと。「於是毎日講妙法一乗 毎夜修念仏三昧」(『本朝文粹』卷十一「七言 暮春於六波羅蜜寺供花会 聽講法華經同賦一称南無仏」慶滋保胤)「猶瀝肝胆偏帰妙法」(『本朝文粹』卷十一「讀法華經廿八品和歌序」藤原有国)

◎大宝蓮二宝蓮は蓮の花、蓮華に同じ。法華經のこと。「大宝蓮之萼貫四時而不凋」(『本朝文粹』卷十四「村上天皇母后四十九日御願文」大江朝綱)

◎江二二姓氏に数字を加える呼び方は中国の排行に倣ったもの。排行とは、一族の同じ世代を年齢順に呼ぶ方法。日本では兄弟間で行われる例が多い。したがって、「江二」は大江家の二番目。ここは匡衡自身を指す。ただし、『尊卑分脈』によれば、匡衡に兄弟はおらず、また匡衡自身も自作の中で兄弟について言及していない。和泉式部の父大江雅致が匡衡の兄という説もあるが(岡一男「和泉式部の生涯と歌壇的閱歴」『源氏物語の基礎的研究』今浜通隆「述懐」古調詩。一百韻」訳注第三段落『本朝麗藻全注釈二』)、確証はない。

◎菅三二これも排行と考えれば、菅原家の三番目。匡衡の同世代とすれば菅原輔正の三男、菅原為紀(九五七—一〇〇二)が考えられる。ただし、匡衡よりも五歳年少であることに疑問が残る。排行ではなく、菅三品こと菅原文時を指すという説もあるが(大曾根章介「大江匡衡」『大曾根章介日本漢文学論集二』、『江吏部集』中では卷中七十九「自愛」に「問頭博士菅三位」の句があり、文時は匡衡の対策受験の時の出題者であった。匡衡にとつて菅三品文時は一つ上の世代の尊敬すべき存在であったことは確かだが、「菅三位」又

は「菅三品」を「菅三」と略すことがあるかどうかは不明。

◎十有五入学二十五歳で大学寮に入学する。康保三年(九六六)。大学寮入学に決まった年齢はないが、『論語』為政篇の有名な句、「吾十有五而志于学」によつたか。匡衡は紀伝道(文章道)の学生となつた。

◎執豆与籩二豆は木製、籩は竹製のたかつき。供物を盛つて祭祀に用いる器具。儒学の徒として孔子を祀ること。「籩豆有且侯氏燕胥」(『詩経』大雅「韓奕」)「周廟邦甸侯駿奔走執豆籩」(『書経』武成)「籩豆之事、則有司存之」(『本朝文粹』卷九「仲春积奠聽講孝經同賦資事父事君」菅原道真)

◎奉寮試二入学後の最初の試験。史書の素読が課せられる。合格すると擬文章生となる。「凡擬文章生以廿人為限。補其闕者、待博士卒。即寮博士共試一史文五条」(『延喜式』卷二十「大学寮」)

◎音訓無所愆二音読も訓読も読み誤るところがなかった。この時の史書が何であつたかは不明だが、一つの読み誤りもせず試験を終えることは、以下の『源氏物語』の例から言つても珍しいことであつた。「御師の大内記召して、史記の難き卷卷、寮試受けむに、博士のかへさふべきふしぶしを引き出でて、ひとわたり読ませたまつりたまふに、至らぬ限もなくかたがたに通はし読みたまへるさま、爪、じるしのこらず、あさましきまでありがたければ、」(『源氏物語』少女)

◎栖遲二ゆっくり休む。棲遲に同じ。世を避けて田野にあること。「衡門之下 可以棲遲」(『岳才名冠世 為衆所疾 遂栖遲十年 出為河陽令 負其才而鬱鬱不得志』(『晋書』潘岳列伝)「險阻嘗之矣 栖遲命也夫」(『白氏文集』九〇八「東南行 一百韻」)未だ隱遁には早いと思わ

れる年齢の重光の「栖遲」の意味については、後藤昭雄『人物叢書 大江匡衡』「大学での修学」に言及がある。

◎亡考Ⅱ亡き父。考は父。大江重光。生没年未詳。「臣亡考濟方欲大挙 奄喪父兄 使垂成之功 不獲一簣」〔『南史』夷貊下・東夷・倭国列伝〕

◎提奨Ⅱ取り立てる。推挙する。「予十有五始志学 十八頗知属文 時無援助 未遇提奨」〔『本朝文粹』卷八「延喜以後詩序」紀長谷雄〕

◎心灰Ⅱ心が動かず灰のように冷え切っていること。「心固可使如死灰乎」〔『莊子』齊物論〕「心灰不及爐中火 鬢雪多於砌下霜」〔『白氏文集』「冬至夜」〔『千載佳句』上「冬興」にも所収〕〕

◎自然Ⅱ人為の加わらないこと。「於是觀其如此 悲感自然」〔『本朝文粹』卷十四「宇多院為河原院左大臣没後修諷誦文」紀在昌〕

◎学問料Ⅱ奨学金。六十七「喜息息举周賜学問料。聊写所懷寄呈廊下諸賢」の「学問料」の語釈参照。

◎三代Ⅱ維時、重光、匡衡の三代か。彼らが学問料を支給されたかどうかは不明。

◎崙遭Ⅱ崙は山のみ、遭はゆきなやむこと。険しい山道をゆきなやむこと。

◎文人Ⅱ積奠文人職。春秋の積奠の際、詩を賦して献上する役。↓工藤重矩「平安朝における「文人」について」『平安朝律令社会の文学』に詳しい。

◎両儒Ⅱ二人の文章博士。積奠文人職は文章博士二人の推薦によって決定されたらしい。匡衡が寮試に合格した時の文章博士は菅原文時と藤原後生であって〔『二中歴』「儒職歴」〕、大江氏出身の博士ではなかった。

◎頗偏Ⅱかたよること。不公平。「意者多迷其統、取遺頗偏」〔『後漢書』「方術伝序」〕

◎比及Ⅱ二十四Ⅱ比は頃に同じ。二十四歳になった頃。天延三年（九五）。

◎纔Ⅱわずかに。やっとのこと。

◎勅宣Ⅱ文章生登用試験、すなわち省試受験の勅許の宣旨。省試に合格してはじめて文章生となる。「凡擬文章生、毎年春秋簡試。以丁第、已上者、補文章生」〔『延喜式』「大学寮」〕

◎登竜門Ⅱ竜門は黄河の中流にある激流の難所。ここをさかのぼることができた魚は龍になるといふ。転じて、立身出世すること。「李元礼。風格秀整、高自標持。欲以天下名教是非為己任。後進之士、有升其堂者、皆以為登竜門」〔『世説』「德行篇」〕

◎沂流Ⅱ流れをさかのぼる。「沂流從漢沔 循路転荆衡」〔『白氏文集』一一〇四「江州赴忠州 至江陵以来 舟中示舍弟」〕

◎重淵Ⅱ深い淵。「於是沈辞荆怫悦 若遊魚銜鉤而出重淵之深」〔『文選』卷「文賦」陸機〕

◎教学為先Ⅱ匡衡の受けた省試の詩題。「礼記」学記篇を出典とする。「古之王者 建国君民 教学為先」〔『礼記』「学記篇」〕この時の詩は『江吏部集』巻中に載せる。

◎仲尼弟子名Ⅱ孔子の弟子の名。仲尼は孔子の字。^{あな}「五言八十字 每句用仲尼弟子名」〔『江吏部集』巻中「教学為先」制注〕

◎旃Ⅱこれ、これを。代名詞。ここでは直前の「仲尼弟子名」を指す。

◎瀝Ⅱ尽くす、述べる。「莫不登高望遠 含毫瀝思」〔『本朝文粹』卷八「八月十五夜陪菅師匠望月亭同賦桂生三五夕」紀長谷雄〕

◎華牋Ⅱ美しい料紙。牋は箋に同じ。ここは省試の答案用紙をいう。

「花牋印了排窠濕錦幪裝來耀手紅」《白氏文集》一二四五「妻初授邑号告身」の「花牋」は辞令用の花模様的美しい紙のこと。

◎及第十六人〓省試及第は十月二十八日《中古歌仙三十六人伝》。文章生の定員は二十人で、欠員が出た時に省試を行う。この時の匡衡以外の合格者は不明。

◎曳裾〓もすそを地面に引きずる。「曳長裾 飛広袖 奮長纓 英偉之士 莞爾而即之」《全漢文》「酒賦」鄒陽

◎周旋〓めぐること。

◎明年〓翌年。省試合格の翌年なので天延四年(九七六)。ただし、『中古歌仙三十六人伝』には、匡衡の文章得業生補任は天延三年十二月二十八日とある。

◎秀才〓文章得業生の唐名。文章生二十人の中から二人が選ばれる。儒者としての出発点にあたる。

◎豫樟〓樹木の名。くすのき。くすのきは生じてからそれと知られるまで七年かかるという。「淮南子 豫章生七年可知」《藝文類聚》木部下「豫章」

◎期七年〓文章得業生から対策受験までは原則七年以上が必要だった。「凡得業生者、補了更学七年已上、不計前年、待本道博士挙録可課試之状、申省」《延喜式》「大学寮」

◎二十八献策〓献策は対策に同じ。大学寮紀伝道における最高試験。

匡衡二十八歳。すなわち匡衡は文章得業生補任後、わずか四年で対策に臨んでいる。この時の策問(問題)の題は「寿考」、問頭博士は菅原文時であった《本朝文粹》卷三「寿考」。

◎徵事〓策問中の小問、具体的な設問。↓佐藤道生「平安時代の策問と対策文」『Minds of the Past』が対策の構造について詳述する。

◎玄又玄〓大變奥深いこと。難しいこと。『老子』による語。「玄之又玄 聚妙之門」《老子》第一章「今所撰玄又玄也」《本朝文粹》卷十一「新撰和歌序」紀貫之

◎射鵠〓的に当たる。対策に及第すること。「命翰林菅学士講之。学士射鵠之業累跡 鵬龍之才陶性」《本朝文粹》卷九「北堂漢書竟宴詠史得蘇武」紀在昌

◎貫穿〓つらぬきうがつ。広く学問に通じること。「亦其涉獵者広博貫穿経伝 馳騁古今 上下数千載間 斯以勤矣」《漢書》「司馬遷伝」

◎三十一給官〓三十一歳で官職を得る。匡衡は天元五年二月五日、檢非違使に補せられた。ただし、文章得業生の檢非違使就任は異例のことだったらしい。「召御前被仰云、檢非違使別当宣旨可下之：右衛門尉大江匡衡、儒者当仁：太相国(藤原頼忠) 被申云：又匡衡者秀才、自古以来、不知為秀才者蒙使宣旨之者：」《小右記》天元

五年二月四日条「早朝奏太相国報奏之趣、被仰云、以左藤原為長・師頼・右大江匡衡可為檢非違使者」《小右記》天元五年二月五日条

◎廷尉〓檢非違使尉の唐名。「廷尉之門塵深 咲雀羅於寒草之露」《本朝文粹》卷十「暮春於尚書右中丞亭 同賦閑庭花自落」大江以言

◎鷹鷂〓たかとはやぶさ。鷹やはやぶさが小鳥に襲いかかるように、不正に対して厳しく処すること。「進退有懼、心身不安。譬猶鳥雀

之近鷹鷂矣」《本朝文粹》卷十二「池亭記」慶滋保胤

◎三十三榮爵〓三十三歳で五位となった。榮爵は五位の別称。永観二年(九八四)正月、從五位下に叙せられる《中古歌仙三十六人伝》。

◎憲台〓彈正台の唐名。永観二年十月彈正少弼に任ぜられたことをいう。《中古歌仙三十六人伝》「縦宰府忍達宮闕之前 而憲台恐安玉

条之下」《本朝文粹》卷十二「大宰答新羅返牒」菅原淳茂

◎緩刑鞭Ⅱ後漢の劉寛の故事。部下に過失のあったときも、蒲の穂を鞭の代わりとして苦痛を与えなかった。刑罰をゆるくすること。寛大な処置を行うこと。「吏人有過、但用蒲鞭罰之、示辱而已、終不加苦」《後漢書》劉寛伝「刑鞭蒲朽蚩空去」《和漢朗詠集》卷下「帝王」

◎三十八翰林Ⅱ三十八歳で文章博士となった。翰林は翰林主人。文章博士の唐名。永祚元年（九九九）十一月に文章博士に任ぜられたことをいう《中古歌仙三十六人伝》。

◎蝸舎Ⅱかたつむりの殻。我が家の謙称。小さな家。「予雁門散吏、蝸舎閑居」《本朝文粹》卷十二「鉄槌伝」

◎引群賢Ⅱ文章博士として大学寮紀伝道の儒者たちを率いていくこと。

◎四十六学士Ⅱ四十六歳で東宮学士となる。学士は東宮学士。この時の東宮（皇太子）は居貞親王、後の三条天皇。長徳三年（九九七）に選任《中古歌仙三十六人伝》。

◎龍楼Ⅱ漢代、太子の宮門の名前。転じて皇太子の宮殿。「龍楼雞戟」

《初学記》「皇太子」字対「龍楼永樂猿巖弥堅」《本朝文粹》卷十三「浄妙寺塔供養呪願文」大江以言

◎景気Ⅱ様子、ありさま。

◎妍Ⅱことむなし、うるはし。美しいさま。「独倦冬官之寒冷未慣春天之妍和云爾」《本朝文粹》卷十「春日陪第七親王風亭同賦繞簷梅正開」橘正通

◎四十七四品Ⅱ四十七歳で四位に叙せられる。四品は四位に同じ。長徳四年（九九八）正月七日従四位下《中古歌仙三十六人伝》。

◎衡与銓Ⅱ式部省の職。衡と銓とは選考のこと。人物、才能をはかる。人事考課は式部省の職務。ここでは式部権大輔となったこと。

◎尽日枕帙眠Ⅱ尽日は一日中。枕帙は、書物を枕にすること。読書に倦んで眠ること。「看山尽日坐枕帙移時睡」《白氏文集》二五八「閑居」による表現。

◎疎帷Ⅱ薄く粗末などばり。「單幕疎簾貧寂寞涼風零露秋蕭索」《白氏文集》九五六「秋晚」

◎颯颯Ⅱ風の悲しげな音。「大声粗若散颯颯風和雨」《白氏文集》八二「五絃」「指底商風悲颯颯舌頭胡語苦醒醒」《白氏文集》一〇八四「潯陽秋懷。贈許明府」

◎芊芊Ⅱ草木の茂つて盛んなさま。「美哉国平鬱鬱芊芊」《列子》力命「松桂乱無行四時鬱芊芊」《白氏文集》二六四「遊悟真寺詩」

◎遙聽雁櫓過Ⅱ「雁櫓」は『白氏文集』二四九五「河亭晴望」の「秋雁櫓声来」を典拠とする語で、空を渡る雁の声を櫓の音に喩えた表現。三十二「嵯峨野秋望」の「雁櫓」の語釈参照。

◎空任蛛網懸Ⅱ「疎織短截充匹数藕糸蛛網三丈余」《白氏文集》一五八「陰山道」

◎青鳥Ⅱ西王母の使いとされる鳥。ここでは、天皇の勅を伝える蔵人のこと。六位の蔵人の袍が浅黄色（青緑色）であることから言う。「七月七日、上於承華殿齋。正中、忽有一青鳥、從西方来、集殿前。上問東方朔、朔曰、此西王母欲来也。有頃、王母至。有二青鳥如鳥、俠侍王母旁」《漢武故事》《藝文類聚》九十一鳥部中「青鳥」所収

◎勅喚Ⅱ天皇のお召し。「非彼恩容侍臣、勅喚文士、未曾清談遊宴、夢想追歎者乎」《菅家文章》卷「早春侍宴同賦春暖心製」《本朝

文粹』卷八にも所収)

◎驚遽_レ「職之師君、驚遽未止」『本朝文粹』卷四「為忠義公辭職第
四表」大江匡衡

◎衣裳顛_レ天皇の突然のお召しにあわてて、衣裳をさかさまに来てしま
まう。『詩経』国風「東方未明」による句。「東方未明 顛倒衣裳 顛
之倒之 自公召之」『詩経』齐風「東方未明」

◎促車向西行_レ匡衡の家がどこにあったかははっきりしないが、曾孫
匡房の邸は二条北東洞院西にあったことから、匡衡邸も同じ場所であ
ったと考えられる。二条北東洞院から御所は、まさに西の方角にあ
る。「又仰云、江帥ヲハ見きや。申云、不見候。仰云、尤遺恨也。
故二条殿いみしき物ニせさせ給き。彼ハ二条北、東洞院西ニあり」

『中外抄』下二『中右記』永長元年五月六日条

◎縹袍殆不全_レ縹袍は粗末な綿入れの上着。粗末な着物を言う。苦学
する儒者の象徴でもある。「子曰、衣敝縹袍与狐貉者立、而不耻者
其由也与」『論語』「子罕」第九「招留潤屋蓑簾出 厭却縹袍閉
戸籠」『本朝文粹』卷十二「秋夜書懷呈諸文友兼南隣源処士」藤原
在列「殆不全とは、突然のお召しに服装を整える余裕がなかったこ
とをいう。自謙のことば。

◎待賢門_レ平安宮外郭十二門の一。大内裏の東側の門。東大宮大路に
東面する。牛車で参内する者はこの門を利用した。

◎禁掖_レ宮中。掖は御所の左右の掖門。「既有選納之承君恩、豈无出
入之許禁掖」『本朝統文粹』卷四「辞撰政表」藤原敦光

◎中涓_レ天子の左右に侍する者。藏人の唐名。

◎夕郎_レ藏人の唐名。「安存客館馮朝使 出入公門付夕郎」『田氏家集』
卷中「敬和裴大使重題行韻詩」

◎孔子世家_レ『史記』「孔子世家」のこと。

◎勦覽_レ天子がご覧になること。「伏望、勦覽降臨、宸衷曲鑑」『菅
家文草』卷「辞右大臣第三表」『本朝文粹』卷五にも所収

◎汗浹背_レ背中が汗びっしょりになる。緊張するさま。「応対易迷、
汗浹於周勃之背」『本朝文粹』卷四「為貞信公辞撰政第二表」大江
朝綱

◎自尊_レ自分勝手にする。「賤而好自尊」『中庸』

◎加點_レ訓点を加える。読み方を記す。「聊举一端、文不加点云爾」『菅
家文草』「扈從雲林院不勝感歎聊叙所觀」『本朝文粹』卷九にも所
収

◎応于乾_レ乾は君、ここは一条天皇を指す。「乾以君之」『易』説卦
「是故德配乾位、方似聖人之云為」『本朝文粹』卷三「松竹問」大
江以言

◎祖父言_レ本詩中の祖父大江維時が少年の匡衡に対して言った、お前
は帝王の師となる相があるとの言葉。「汝有帝師体 必遇文王田」『江
吏部集』中卷「述懷古調詩」を指す。

◎湿巾_レ涙で手拭を湿らす。「秋風暮雨斷腸晨 憶古懷今淚湿巾」『本
朝文粹』卷一「貧女吟」紀長谷雄

◎涙潺湲_レ潺湲は涙や水の流れるさま。「横流涕兮潺湲」『楚辞』九
歌「湘君」

【通釈】

思いを述べる古調詩

ゆったりと何を詠ずるのか

それは我身の来し方の由来だ

七歳で読書初めにのぞんだ

竹馬に乗るような子どもが学問によって幼さから抜け出した

九歳で始めて詩を作った

春の野道で花を摘むという内容だった

十三歳で元服した

祖父維時卿がその場にお出でくださり

耳元で次のように熱心に教えてくださった

努力して困難に向かいなさい

私は学問の力によって

公卿の一員となることができた

おまえは帝王の師となる相がある

きつと帝のお引き立てにあずかるだろうと

少年の私はこのことばを信じ

孤高を保って俗世から離れた

帷を下ろし庭も見ずに書を読み

門を閉ざして貴人のお召しにも応えなかった

囲碁のような遊びは「隠遁」を意味するので嫌ってせず

投壺のような遊びは譲り合いが煩わしくてやめてしまった

そしてひたすら孔子の学問に耽り

困難な儒学の道を究めようとした

夜は詩作に没頭し

朝には広大な学問の大海に挑んだ

あらゆる苦勞を経験し

寂しい気持でかゆをすすするような質素な生活に耐えた

（勸学会の結果となつてからは）西方の極楽浄土を願ひ

月に六度の齋日には坐禪を学び（心を落ち着けた）

（勸学会に）歩を運んでは南岳大師の教えを学び

月に五日はなまぐさものを断つた

口には般若経を唱え

大日如来の智慧に礼拝して煩惱を絶とうとした

心には法華経を念じ

妙なる教えに帰依して救いを求めた

そのような苦勞の結果 遂に江二の字が菅三と並べ称されるようになった

うになつた

〔始め大学寮では菅三と江二とを双壁とよんだ〕

十五で大学寮に入学した

長く儒学の徒としての生活が始まったのだ

十六で寮試を受験した

音読も訓読も誤るところはなかった

が未だ榮達しないうちに職を退いていた父が

余りにも早く世を去つてしまった

それからは他に推挙してくれる人もなく

私の心は灰のように冷え切つた

学問料を申請しても（認められず）

祖父以来三代の苦難は続いた

釈奠文人職の任を申請しても

両文章博士は不公平にも推薦してはくれなかった

二四歳になつたころ

ようやく省試の宣旨を賜つた

学問を頼りにして出世栄達の入り口に立ち

厳しい試験に耐えて深遠な言葉を探した(省試の詩作に挑んだ)

当日そつと題目を見ると

教学を先と為す(教育を基礎とする)という題であった

孔子の弟子の名を

句毎にそれを用いて詩を作るというものだった

全部で五言八十字

自分の思いを美しい料紙に書き表した

及第したものは十六人

皆で束帯の裾を引き感謝の意を表して拝舞した

翌年秀才に推挙され

対策まで七年を期していつそう励んだ

二十八歳で対策に臨んだが

設問は大変難しいものだった

何とか半分以上に答え

やつとの事で及第することができた

三十一歳で官職に就き

検非違使尉として厳しく不正をとりしまった

三十三歳で五位に叙せられ

弾正少弼として罪人を寛大に処することに務めた

三十八歳で文章博士となり

貧しい家ながら多くの儒者たちの指導者となった

四十六歳で東宮学士となり

東宮さまの宮殿のすばらしい有様を間近に見た

四十七歳で従四位に叙せられ

同時に式部権大輔として人事選考にあたった

その年の秋、九月

私は学に倦んで一日中書物を枕に寝ていた

粗末などばりに風が吹いて悲しげな音を立て

訪れる人もいない庭には草が生い茂る

天高く渡る雁の鳴き声が聞こえ

部屋の隅には蜘蛛が巣を張っている

その時突然誰かが門を叩いた

勅使の蔵人は青い袖をひるがえし

天皇のお召しだと告げる

突然のお召しにあわてふためき衣装をさかさまに着る始末

牛車を急がせて御所のある西に向かうが

粗末な衣裳は不揃いでちぐはぐだった

待賢門から入り

宮中で蔵人に尋ねた

蔵人は書物を持ち

口頭で主上のお言葉を伝える

この『孔子家語』は

諸家の説に違いがある

大江家の説を以て

主上のお目にかけるべく備えよと

勅命を戴いて緊張のあまり汗は滝のように背を流れ

浅学の身で自分勝手な説になることを恐れた

だがひとたび筆を執ればたちどころに点を加えること

あたかも掌を指すが如くすらすらと主上の御下問に答えるの

だ

少年の日 祖父の「帝師となるだろう」の言葉を思い出すと

涙がはらはらと流れ 巾を濡らした

※以上、本詩前半は、七歳で学問を初めてから、祖父の「お前には帝王の師となる相がある」という言葉を信じて、さまざまな困難を乗り越え苦学した末、四十七歳で祖父の言葉通り、帝師となるまでを描く。

付記 本詩二十七句から三十四句までの解釈については、二〇〇六年八月に中国長春師範大学で開催された国際シンポジウム「世界における日中文化と文学」での研究発表「大江匡衡の儒仏道」に基づく。発表後、波戸岡旭氏、吉原浩人氏、後藤昭雄氏、中島俊博氏から天台宗、往生伝についての御教示、御質問をいただいた。学恩に感謝いたします。

(きど ゆうこ・鹿児島県立短期大学教授)